「今日の説教、聴き手のために」　2008/9/7　明治学院教会(126)

（このプリントは毎週作っているものです）　岩井健作

「神のデッサン」

マルコ福音書１章１６節－２０節

１、このテキストの特徴は、イエスが弟子を選んだという事実であって、その逆ではないという事です。聖書の一般論からいえば、ここは、「神の選び」の物語です。「神の選び」には三つの特徴があります。

①神が主語だということです。旧約聖書のアブラハム、モーセ、サムエル、アモス、イザヤ、エレミヤなどの召命記事を思い起こします。

②選びは何の功績にもよらないことです。（申命記7/7,コリントー1/27）。ガリラヤの漁夫たちもそうでした。

③招きの言葉は「ついてきなさい」だけであって、どこまで従うかは、その徹底の度合いなどは問題になっていません。招きの恵みとしての性格です。

２、マルコの物語には、独特は文章の個性があります。非常に単純な文章です。小学生の日記のような書き方です。マルコがギリシャ語が母国語でないことからくるぎごちなさと同時に、大事なことだけを記し、余分なことは書いていないのです。

３、１８節「二人はすぐ網を捨てて従った」というのは一大決断ですから、そのような決断に至った状況を小説のように書いてもよさそうです。選びに至るまでの個人史や心情です。しかし「イエスが招いた」そうして「したがった」と、そのことだけを描いています。根底にある問題にだけ目をとめているのがこの伝承です。マルコは「すぐに」という短い言葉を使います。どちらかというと稚拙な文章表現だといわれています。原文ではエウチュスという言葉が１章だけで１１回使われています（10,12,18,20,21,23,28.29.30,42,43）。これは、もの事が単純に神のイニシャティブで進んで行くさまを表現しています。神の描く一本の線を示しているようです。シモンやアンデレの気持ちというものは描かれていません。またその場の状況も描かれておません。それはいろいろあったでしょう。しかし。それを上回る出来事だけが書かれています。一番底にある。神のご計画だけをマルコは描いています。宣教の業をすすめるのは神ご自身であることだけが浮かび上がっています。一人の人間の生を表面のドラマとして見れば神の描く線は、その人生の背後に隠されてしまいます。しかし、その背後に隠されている神の描く線からその人を見ること、また自分をそのように見るのが信仰です。

４、ある葬儀での感動。「いろいろ社会的な働きもしました。しかし、一人の罪人が救われたその事実だけを語ってください」という喪主の子息（牧師）の言葉。単純な線でデッサンを描くような作業だった。恵みだけをたどれば良い。

５、１９世紀の後半を生きたフランスの画家のドガの有名な言葉。「デッサンは物の形ではない。物の形の見方である」。デッサンはそこにある物を、どのように見るかという、精神や心の軌跡だということです。弟子召命物語は、神が招いた、というその出来事の線だけが描かれた絵のような物語です。私たちも神の招きの線だけははっきりさせて生きて行きたいと思います。